

第 60 回若手研究者・院生情報交換会  
「質的研究—フィールドワークを焦点に」 報告

大阪公立大学生生活科学研究科  
博士後期課程 3 年  
LU YUYING

2026 年 1 月 24 日（土）、第 60 回若手研究者・院生情報交換会が、同志社大学新町キャンパスにて開催された。本交流会では、関西学院大学人間福祉学部教授の白波瀬先生より、「質的研究—フィールドワークを焦点に一」をテーマにご講演をいただいた。

白波瀬先生は、学部生時代に岡山県北部におけるシャーマニズムの護法祭を対象としたフィールドワークを実施され、その後、大学院生時代には釜ヶ崎でのフィールドワークを開始し、支援研究に取り組まれてきた。今回の講演では、学生時代から現在に至るまでのフィールドワークの経験を、参加者と共有してくださった。当日は厳しい寒さであったが、会場内は和やかで温かい雰囲気に包まれていた。

先生は、学部生時代、シャーマニズムの護法祭に関する調査のため、自転車で岡山まで向かい、途中で野宿もしたというエピソードがあった。状況に左右されず目的に向き合い続けるという姿勢は強く印象に残った。

今回のテーマであるフィールドワークに関して、先生が指摘された 2 点は非常に示唆的であった。1 点目は、インフォーマルな調査やインタビューの重要性である。2 点目は、フィールドワークの過程において、当初設定したリサーチクエスションからずれること自体は、必ずしも否定的に捉える必要がないという点である。

具体的なリサーチクエスションを設定してフィールドワークに入った場合は、研究者自身の関心に引き寄せられ、見たいことを見る、聞きたいことを聞くにとどまり、断片的な調査に終わってしまう可能性がある。しかし、インフォーマルな調査やインタビューを通じて、あらかじめ設定した問いからは見えにくい現実の側面や特徴が浮かび上がってくるかもしれない。つまり、先生が述べられた「見る・聞くから見える・聞こえる」という転換は重要である。一方で、インフォーマルな調査は倫理的な制約から研究成果として用いることが難しい場合は多く、調査結果の扱いには工夫が求められる。この点については、質疑応答の場でも活発な議論が交わされた。

いかなる場合においても、インフォーマルな調査やインタビューは理論と現場をつなぐ接点となり、現場理解を深める上で欠かせない要素であると感じられた。

さらに、現場に深く関わり、巻き込まれていく過程で、当初のリサーチクエスションが必ずしも最も本質的ではなくなる可能性や、より重要な問いが浮かび上がってくる可能性があることも指摘された。フィールドワークの展開によって、当初の問いが覆されたり、大きくずれたりすることは決して消極的なことではなく、自身の研究の価値や意義を見出す契機となり得る。

むしろ、初めから具体的で明確なリサーチクエスションを設定してしまうと、フィールドに入り込む中で観察の視野が狭くなるリスクがある。フィールドワークを積み重ねることで、現場の特徴や分析の軸が徐々に見えてきて、そこから理論化へとつなげていくことが可能になるという点は、今後の研究を進める上で大きな示唆を与えるものであった。

本交流会は、フィールドワークについて貴重な勉強の機会となり、参加した院生にとっても、今後の研究活動において大いに参考となる有意義な時間であった。